

辻真先

書下し長篇パノラマミステリー

怪盗天空に消ゆ

幻説銀座八



怪盗^{かいとう}天空^{てんくう}に消ゆ^きく幻説^{げんせつ}銀座^{ぎんざ}八丁^{はちちょう}

著者^{つじまさき} 辻真先

発行者 徳間康快

発行所 株式会社徳間オリオン

東京都港区東新橋一丁目十七 大鉄ビル
郵便番号 一〇五

電話 〇三五六八三五六一(代)

発売元 株式会社徳間書店

東京都港区新橋四丁目

郵便番号 一〇五五五

電話 〇三三四三三六三二(代) 振替東京四四四二九二

©Masaki Tsuji 1994

定価はカバー・帯に表示してあります。
落丁・乱丁本はおとりかえいたしません。

Printed in Japan

辻真先

書下し長篇パノラマミステリー

怪盗天空に消ゆ

幻説銀座八丁



ISBN4-19-850065-7

C0293 P780E (0)

定価＝780円(本体＝757円)

TOKUMA  **NOVELS**



かいとうてんくう き げんせつざんざ はつちよう
怪盗天空に消ゆ～幻説銀座八丁～
つじ まさき
辻 真先

モガ・モボ、エログロ・ナンセンス。そんなボキャブラリーが乱舞した銀座はまた、新鮮な市民文化を生み出す母胎でもありました。

当時のジャーナリスト松崎天民いわく、「金の無い奴が、有るような顔をして、横行闊歩する所さ」

懐かしくも危うかったあの時代を背景に、探偵追跡大活劇全一卷をご覧にいれましょう。

書下し長篇パノラマミステリー

怪盜天空に消ゆゝ幻説銀座八丁ゝ

辻真先

徳間書店



怪盜天空に消ゆゝ幻説銀座八丁ゝ 目次

木んのり灯ともす銀座のバー
ン百円豪遊カフェーの客たち
かい盗銀座男爵天賞堂を襲う
ク心の一兵魔術の助手に扮す
デっかい地震がカフェー直撃
ハてな銀座男爵の見えない手
なぜか怪盗は消えてしまった
イたぞあやしい女がひとり！
ケつ未お預けちよっぴり道草
しき戦ドライバーの麗人探偵
どこへ行った青鳩荘の侵入者
オウフォードが故障して飯倉
アら不思議西洋館のからくり
ソっと登場した黄金バット？
ビ人と少年が追った怪人消滅

9 16 25 35 44 51 58 69 73 79 88 96 107 117 124

ミわたす限り銀ぶら族の人波
スい理交す舞台は下宿青鳩荘
テ品の種は銀座男爵と大地震
リ屈論争の女探偵とひげ刑事
イっ兵が見つけた小田の消滅
モく撃したのはバットの凶行
タちまちあつまる情報と推理
マさかと思う空中散歩の美女
ニ科刑事がジレンマになやむ
はん人は○○○の○○○○だ
オし問答とワナをかける一兵
モン答無用で女探偵格闘する
シにもの狂いのカーチェイス
ロく十年は夢見心地で過ぎて
イかがですかと作者あとがき

ホンのり灯ともす銀座のバー

「クール」は、銀座でも老舗しにせのバーである。数年前有楽町の西武マリオンで、「BAR KOOLと銀座モダン展」が催され、実際の「クール」そっくりのセツトが作られたものだ。

音楽なし、女性のサービスなし。純粹に洋酒を愛する人だけが、古めかしいスタンドめがけて毎夜いそいそと集まってくる。いくつかのテーブル席はあるがカウンターに椅子いすはない。文字通り立ったままの客たちが、ふんだんにならんだ棚の洋酒を肴さかなに、至福の表情でグラスを口に運んでいるだけだ。

そんな店がいまでも銀座にある。

いや、銀座だからある、といった方がいいかもしれない。場所は西銀座コリドー街のむかい側、緑に白抜き文字の看板が目印である。

時間が早いこともあって今日はまだすいており、『夕刊サン』の記者可能克郎かのうかつろうがドアを押すと、カウンターでマスターと話していた那珂一兵なかいっぺいが、すぐ気がついた。

「やあ」

「いらっしやいまし」

昭和四年からこの道ひと筋と聞くマスターの丁寧な挨拶あいさつに迎えられて、克郎はテーブル席のひとつに腰を下ろした。飲むだけならカウンターに限るが、あいにく今夜は仕事だ。一兵が場所を移して克郎の前に座ると、ママがすぐにグラスを持ってきた。

注文したカクテル「クールNO・5」を克郎が一口すすのを見届けて、一兵が話の口火を切った。

「ご注文は銀座の昔話だったね」

「いつか聞かせてもらった奴です」

克郎が首をのばした。お色気記事で悪名高い『夕刊サン』だが、このところ売れ行きが落ちている。

するとなにを血迷ったか編集局長の田丸が、銀座を売り物に格調高くゆこうといいだした。もともと『夕刊サン』本社は東銀座にある。

「カノやん。お前さんならベテランだから人脈があるだろ。スター格の銀座人種をつかまえて書かせてや」

「弱ったな。どっちかというと俺、新宿が縄張りなんだ」

「カノやんは生意気にも『クール』の常連やさかい、ひとりやふたり、飲み友達がおるんやないか？ いまの銀座でなくてもええで。昔なつかし銀座のエピソードを知るような、ジャズで踊ってリキュールで

更けたような……」

いまにも田丸は歌いだしそうになり、おかげで克郎はひとりだけ、恰好の飲み友達を思い出した。

「那珂先生はどうです」

「那珂というところ……ああ、劇画を描いとる人か」

このごろは渋い大人むけ劇画にシフトしているが、代表作がテレビアニメになったこともあって、知名度は高い。

「あの人ならええけど、関西出身やろ」

田丸も大阪出身だった。東京はいまや日本全国の植民地なのだ。

「そうです、若いころ銀座に出てひと苦労したそうです。派手な事件にまきこまれたせいで、国へ帰ったと話していました」

「派手な事件？ 殺人とか誘拐とか、それともアクションとかスペクタクルとか」

「その全部だそうです」

と聞かされた田丸は、餌^{えさ}を見つけたブルドッグみたいな顔になった。

「そりゃあええ、ええ！　すぐ那珂先生に会って話を聞いてこい！」

「しかし先生は売れっ子ですから。すぐ捕まるかなあ」

「そこがお前さんの腕やないか。シベリヤでもアマゾンでもかまへん、追いかけてこい！」

「さいわい那珂先生は在宅しており、早速「クール」で会うことになったのである。」

「銀座を話題にするにはぴったりの店だからね」

昔なつかしい立ち飲みスタイルのバーは、いまではほとんどなくなってしまうが、ここだけは頑固に戦前流を守っているのだ。

だがテーブルの上に置かれた小さなテーブルコー

ダーを見て、好々爺^{こうこうや}然とした一兵も顔をしかめた。

「どうも機械相手はしゃべりにくいな」

「あ、どうも」

あっさりひっこめた克郎が、ノートと万年筆を出すのを見て、一兵は微笑した。

「年寄りがわがまをいってすまん」

「いえ、いいんです。古い銀座の話なら、この方が気分が出ますよ。……那珂先生の体験談なんですよ？」

「そうだよ。そうなんだが……」

と一兵は首をめぐらせて、洋酒棚を見やった。柱に『釣りバカ日誌』のマンガ家北見けんいちの描いたマスターの似顔絵がかかっている。だが一兵の目は、絵に焦点を合わせたのではないようだ。過ぎ去った遠い日々をしばらく見つめていたとみえ、懐かしさをこめて言葉を吐つづけた。

「記憶が薄れてきたな。私を銀座で雇ってくれた店のインテリアも、おぼろげになった。残念なことだ」

「先生がいくつぐらいのときなんですか？」

「十二歳になっていた」

「十二ですか！」

びっくりする克郎を見て、一兵はむしろ不思議そうだった。

「いかんかね。このマスターの古川さんだって、サン・スーシーで働きはじめてのは、十三になったばかりの年だそうだよ」

「学校はどうしたんです」

「ちゃんと出ていたさ、小学校を。もともと古川さんが銀座につとめたのは、高等小学校二年のときだね」

「中学はどうなったんです」

いいかけてやっとなががついた。そうだ、戦前の日

本の義務教育は小学校止まりだった。さして貧しくなくても地方で子供を中学までやる家は多くない。女工も納豆売りも、小学校を出たばかりの少年少女が主だったのだ。

「私の父親は大酒飲みでね。家から通えば収入をのこらず飲まれてしまう。母親のすすめで東京へ出て、着のみのまま飛び出した。財布にはいっていたのは、母親が買ってくれた東京行きの切符と、五十銭銀貨、通称ギザが二枚きりだった」

五十銭というのがどの程度の高額か、戦後生まれの克郎には見当がつかない。

「東京へ辿り着いたとたん、目をまわしそうになった。私の家は大阪といっても河内の田舎だったから、東京駅ホームでまず立往生さ。次から次へはいつくる国電——いやその時分はまだ省線といった」

その程度の知識なら、克郎も持っている。いまのJRはかつての国鉄であり、それ以前は鉄道省が運営していたから、国電は省線電車と呼ばれた。

「その省線が吐き出す人の頭数に目がくらんだよ。最初に銀座へ行く予定でいたから、有楽町駅まで乗るつもりだった。すると省線の中で、だしぬけにひとりのモガに話しかけられたんだ」

モガというのを知っている。モボがモダンボーイなら、モガはモダンガールである。

「イートンフロップ……わかるかな。まあ断髪と思えばいい。眉毛^{まゆげ}を引いて、形のいい唇の右につけばくろがあつて、なんともいえないすてきな匂い^{にお}だった。濃い紫のブラウスに金色のブローチを飾っていた。子供の私に女性の年なぞわかるはずがないが、まだ三十前だったろう。田舎から東京へ着いたばかりの私には、ピカピカと後光がさしているような美

女だったね。そんな女性が、やにわに私の耳に口をつけてささやいたのさ。『私といっしょに次の駅で下りてね』……」

「なんです、そりゃあ」

「なにがなんだかわからない。夢でも見ているような気分で、彼女のいう通りしたさ。どうせ有楽町で下りるつもりだったから」

省線が有楽町駅で止まると、おどろいたことに美女は、一兵の手をつかんで大声をあげたそうだ。

「てっちゃん、ホレ！ のろくさすんでねえだよ！ 姉ちゃまで下り損ねるでネか！」

目をパチパチさせながら引きずり下ろされたときは、省線はもう走り出している。見送った美女が、ケタケタ笑いだした。

「美人だが頭がおかしいらしい、本気でそう思っていると、急に彼女は私に札をいいはじめたんだ。」

『助かったわ、坊や。いまの省線に、半年前捕まえたスリが乗っていたの。私を見てハテナって顔をしてたわ。因縁つけられても困るから、東京に憧^{あこが}れて出てきた田舎娘になりましたの』

そこまで聞いても、まだわからない。

『お姉さんが捕まえたって、どういうことですか』
使い慣れない標準語で苦勞しながら質問したよ。

びっくりしたねえ、その美女は、日本で最初の女探偵だった』

『女探偵、ですか！』

あぶなく婦人警官かと聞きなおしそうになった。

そんな職業が戦前の日本にあるはずはない。女は家庭にはいるものと、生まれながらにして決められている時代であった。

『龍^{りゅう}千景^{せんけい}と名乗ったな。警視庁の刑事に協力して、
おとり
囃^{おとり}となつてスリ集団を捕まえたそうだ。仕立屋銀次

の直系というから、腕ききの箱師たちだったろう。その中で前科のない男が釈放されていたんだ。とつさに田舎者丸だしの私を使って、煙に巻いたところはあつぱれだったね。

『さっきの言葉、どこの方言なんですか』

と聞いたら笑われたよ。

『どこでもないわ。私が作ったばかり』

『俺、お姉さんがほんとに田舎の人かと思った』

『まあ、失礼ね。私は銀座でもうひとつ仕事してるのよ』

……それがつまり、私を雇った店なんだ』

『ははあ。奇縁ですね』

やつと克郎が納得した。

むろん十二歳の男の子のできる仕事は限られている。裏にまわって皿洗いだの、簡単なオードブル作りだの。

「え、もうそのころオードブルなんてものがあったんですか」

「昭和のはじめをバカにしてはいけない」

にこにこしながら一兵が教えてくれた。

「当時のカフェーの広告に曰くさ。『フランスはパリのひそみにならない、紳士淑女の憩いの場所であり、社交場であり、五色の酒を売り、粹なオードブルを用意つかまつる』とあるんだ、ちゃんと」

コピーをそらんじてみせて、一兵がちよつと照れた。

「私も男だったんだね。子供のくせにそんなカフェーに憧れていたんだから」

「あのう……」

おそるおそる克郎が尋ねた。

「カフェーというのは、つまり……なんですか」

「いまの分類でゆけばバーかな。銘仙の着物かなに

か着こんだショートカットの女給が、白いエプロンを背中大きく蝶々結びにして、客に酒をついてるんだ。といつて下司なサービスを考えてはいかんよ。豊富な話題で座をもたせるのが、彼女たちのサービスさ。芸者でもなく仲居でもない、それが銀座の女給というまったく新しい職業だった……」

一兵が年甲斐もなく憧れをこめた口調で、「ジョキユウ」というのを、克郎は一種不可思議な気持ちでながめていた。

おそらくその名には、当時の銀座の魅力を代表するなにかがあったのだ。

「……女探偵の開いていた店も、カフェーだったんですか」

「いや、あれはカフェーと呼べるようなもんじゃない。むしろミルクホールだね」

「ははあ」